



南風原平和ガイドの会

子どもたちに伝えたい…
未来へ続く平和のために私たちができること

2007年、沖縄陸軍病院南風原壕群20号が一般公開されるのを前に、南風原町が第1回「南風原平和ガイド講座」を立ち上げると県内各地から59名の参加があった。その後、講座修了生のうち43名で「南風原平和ガイドの会」が発足された。会は、病院壕の説明を行うことを中心に活動を始め、戦争遺跡と見学者をつなぐ活動をしてきた。2009～2013年の期間中はNPO法人として活動

し、補助金を活用して陸軍病院が所在する黄金森や町内12字のガイドマップ作製などを行った。NPOを解散した現在では、再び病院壕の説明を活動の中心とし、要望があれば町内の小中学校に赴き平和学習を行っている。戦争と平和をテーマに自主的な学習会なども行い、ガイド技術を高めることにも余念がない。

壕を体験することで感じる、戦争の悲惨さ



ガイドの様子。地中に隠すように埋められていた医薬品類の数々。(写真提供：南風原文化センター)

緊急事態宣言が明けた後、屋外で見学できる戦争遺跡のガイド案内は再開しているが、これまでに行ってきた壕内を通過しての見学はまだ再開の見通しが立っていない(2021年10月時点)。感染症対策で換気を行った場合、風の通過や

湿度変化が起こり、壕内の地質が痛んでしまうためである。未来へ戦争遺跡を継承することを考えると、容易に見学を再開できない状況だ。

コロナ禍以前は、修学旅行等も含め年間1万人ほどが訪れており、会のメンバーである約50名のガイドがフル稼働で案内していた。実際に壕内を見学すると、「こんな所が病院だったの?」と驚きの声上がる。壕内部のわずか1.8mの幅にベッドが置かれ、その脇を看護婦などが行き来し治療していた。壕内にトイレもなく、現代の明るく清潔な病院と比較すると、あまりの違いにショックを受ける人も少なくない。足を踏み入ると、肌で感じるものが必ずあるし、ガイドの説明でより伝わるものがある。ガイドをする際には、戦争は二度と繰り返してはいけない、と命の尊さを強調し、参加者1人1人に関心や問題意識を持って欲しいと願っている。

全国で初めて文化財に指定

戦争の悲惨さを伝える場として、南風原町が黄金森の第一外科壕群・第二外科壕群を町の文化財に指定したの

は1990年。第二次世界大戦の戦争遺跡が文化財となったのは全国で初めてのことであり、町独自の文化財指定基準をつくり指定された。その後、調査と検討を重ね20

カテゴリー	観光・地域交流／人材育成		
住 所	島尻郡南風原町字喜屋武257		
電話番号	098-889-7399	設 立	2007年
		人 数	50名
主な活動	壕のガイド、町内学校での紙芝居読み聞かせ(平和学習)		
利用施策	沖縄県雇用再生特別基金事業		
受賞歴	第36回琉球新報活動賞(2014年)、第14回タイムス地域貢献賞(2021年)		

号壕の公開に至るも、人が入るとその分壕は傷んでしまう。1度に壕に入る人数は10名までと制限を設けて案内してきたが、年月の経過による亀裂などもあり、保存と公開のバランスは検討し続けなければならない問題で

ある。

戦争を自身の体験として語れる方が減少する中、当時を伝える貴重な場所をどうにかして守り続けたい。そのため何ができるのか、思索の日々が続いている。

平和の尊さを次世代へ継承



毎年続けている、町内小学校での読み聞かせ
(写真提供:南風原文化センター)

平和ガイド養成講座は、南風原文化センター主導で定期的に実施されており、これまでに延べ137名が修了し

た。受講生の年齢層も様々である。仕事をリタイアした世代も多いが、以前に受けた平和学習がきっかけで講座に参加した高校生もいた。また、同会オリジナルの紙芝居を活用し、会のメンバーが手分けして町内小学校での読み聞かせにも出向いている。そのため、地域に平和の尊さは浸透していると思うが、今の子どもたちにとって、戦争はどこか遠くの昔話になっているように感じるという。平和のバトンを次の世代に繋いでいくためにも、学校や地域との連携を深め、活動を続けていきたいとの方針だ。

身近な場所から戦争を学び、平和を創造する

最後に、今後の取組みについても語っていただいた。

—沖縄陸軍病院に「ひめゆり学徒」らが看護補助要員として動員された経緯もあり、ひめゆり平和祈念資料館などつながりがあるが、各資料館や戦跡、平和ガイド団体などと連携を強めて平和学習を発展させていきたい。戦争を知らない世代には、これまでと同じ伝え方は伝わりにくくなっていると感じるので、工夫し、事実を

きちんと伝えたいと、自分に引き寄せて考えてもらえたら。実際に現場を体感して欲しいというのが大前提ではあるが、壕の状態を考えると、オンラインの活用も検討するべきだと思う。ここに来るきっかけ作りや事前学習にも展開できるのではないかと。これから先も、戦争遺跡を守り伝える一員として私たちができる活動を続け、地域から平和の心を育て発信していきたい—